

「真の共生社会とは何か、あらためて問う」有識者特別寄稿④

社会福祉法人訪問の家理事長 名里 晴美

わかり合う喜びが“共に生きる”につながる

7月26日早朝、テレビから流れるニュースに凍りついた。そして、その後に明らかになっていく犯人の言葉は、さらに私たちの心を暗く苦しい闇へ突き落とした。心は、まだその闇から抜け出せていない。けれど、目の前の人たちとともに、これまでと変わらず歩みを進めていくしかないと思っている。

私共、社会福祉法人訪問の家は、今から30年前の昭和61年、横浜市栄区桂台に、たいへん重い障害のある方の通所施設「朋」を開設した。朋開設に至る道のりには、“高級住宅街に障害者施設はなじまない”という一部住民からの反対があり、法人設立当初から、社会福祉法人あるいは障害者施設が、地域の中でどういう存在となりうるのか、突きつけられたと感じている。しかし、住民の中に「どういう人が何を求めてここに来たいと言っているのか、よく知らないで反対していいのか」と考える人たちも存在した。出会うことの大事さ、関わり合うこと、知り合うことの大事さは、その後の法人運営の基礎となっていく。

重症心身障害児者といわれる朋のメンバーは、身の回りのほぼすべてに介助が必要である。そして、言語的な表現で意思を伝えることは難しい。ちょっとした表情やしぐさ、声のトーン、目つきの違い等々を、周りの人間が受け取ることで、その人のその時の気持ちを推し量るしかない。しかし、そうして交わされる非言語的コミュニケーションの中に、人と人がわかり合うことの喜びや深さ、意味などを見ることができると感じている。言葉であろうとなかろうと、相手に思いを馳せることからでしか、人と人の関わりははじまらない。朋のメンバーは、関わった相手に、そうした感覚を育ませ、根づかせていく。じわじわと、着々と。職員である私たちは、日中活動の場である通所施設というフィールドで、そういう感覚を大事にしてきた。言葉で言えないから、意思がないなんてとんでもない、相互の関係性の中で、その人が希望しているであろうことを導き出すことはできる。関わっているいろいろな立場の者が意見を出し合い、その人の意思、希望を明確にし、実現に向けていくということを繰り返してきた。その繰り返しと積み重ねの中で、重い障害があるとされる人たちの多くが、表現する力を向上させ、明らかに世界をひろげていく。本人たちの発信から、様々な活動が展開され、暮らしの場としてのグループホームも生み出された。

グループホームは、障害がある人が必要なケアを受けながら、可能な限り一般の人と同様の普通の暮らしを続けるための一つのスタイルである。訪問の家が運営するグループホームには、重度重複の障害がある人が多く暮らしている。家族による介護が難しくなっても、通い慣れた日中活動場所に通い続け、少人数の家庭的な“家”で暮らしたいという本人、家族の希望が実現されている。表情の変化やその人なりの訴えを受け止められながら、そしてその人ならではの余暇、楽しみもひろげながら、自分なりの生活をつくっている。グループホームには、多くのヘルパーの支えが不可欠である。ヘルパーのほとんどは、主婦や一般企業で働いていた経歴を持つ。いわゆる福祉のプロではない。

しかし、重い障害のある人と、生活の場で身近に濃密に関わることで、不特定の「障害者」と、というより、特定の“その人”との関係を深めていく。微細な表現をキャッチし、そうしてどんどん親身になっていくのである。もちろん、グループホームを開設、運営する上での課題は多く、ニーズにこたえ、次々に新設できているわけではない。しかし、こうした暮らしの中に、「共に生きる姿」を見てきたのは事実である。

訪問の家は、朋開設後、周辺にいくつかの事業を展開しながら、平成27年、法人設立30周年を迎えた。30年間、障害のある人が、街のあちこちを歩き、お店やイベントに出向き、自治会主催の運動会や夏祭りにも参加してきた。障害のある人たちが、大勢、楽しげに参加する夏祭りの光景に、自治会役員の方は、「これがわが街の祭」と言われた。隣接する保育園、小学校、中学校とも、一年を通じた交流を継続している。小学校とは、一年がかりで一緒に演劇を完成させたり、障害のある人が使いやすい道具を考え、共同製作するなど、年ごとにテーマを決めて取り組む。はじめは緊張していた小学生たちが、障害のあるメンバーの隣でのびのびと活動し、一緒に笑っている姿は本当にほほえましい。ここで育ったかつての子どもたちは、障害のある人の存在を「普通のことだった」と答えた。障害がある人にも好みがあり、好きなことを楽しんだり、時には何かに一生懸命に頑張ったり、理屈ではなく「自分と同じ」と感じ、育つことが、どれほど大きな意味を持つかはかりしれない。



地域の夏祭りでパチリ



「空き缶ありがとうございます」「ご苦勞様」

街の中を数人でまわり、協力してくださるご家庭から空き缶を回収しているグループがある。歩行ができる人は職員と連れ立って、車いすの人は足元に大きなかごを付け、比較的静かな昼間の街中をそれぞれのペースで歩き、在宅の方とは「こんにちは」、「今日も元気ね」と言葉を交わしながら手渡しでいただく。長年その姿を見ていた地域の方から、「日中、お年寄りばかりになる街の防犯になっている」と言っていた。その言葉をヒントに、防犯協会から腕章を支給していただき、自分たちでベストやのぼりをつくって「防犯パトロール」とすることとした。地域の方々と情報共有し、目を凝らしてみたら、障害のある人が担えることはまだまだあるのだろうと感じる。

訪問の家が手掛ける事業の一つに、横浜市地域ケアプラザ（指定管理者制度）がある。高齢者のデイサービスや居宅支援等に加え、住民による自主的な活動を支援する「地域活動交流事業」も主要なメニューの一つである。ここを拠点に活動する方々の中には、「朋ができたことが地域で活動をはじめのきっかけだった」という方も少なくない。地域の中にある課題に対し、住民として自分たちでできることをしよう、そして自分たちの住む街



防犯パトロール中

を「誰もが暮らしやすい街、住みたくなる街にしよう」という意識が非常に高い。この街の人たちがそうした思いを語るとき、“誰もが”の中に、当たり前には障害のある人たちも含まれている、と実感する。重い障害のある人と地域の人たちが出会い、気持ちを通わせていく中から、人の輪が築かれていった。その営みは、まちがいなく「共に生きる社会」の一つの姿、事実であると確信している。

痛ましい事件を、私たちは忘れることはできない。一人一人の命が軽んじられ、社会が作り出したとも言える間違った思想を持つ他者の手によって、終わらされた人生があったことを、忘れてはならない。残された私たちは、今出会っている人たちの、いきいきと堂々と生きる人生を、絶対に守り抜く。言葉だけではなく、法律も、制度も、国民としての姿勢も、行動も、あらゆる角度から見直し、実践する。忘れない、屈しないとは、そういうことである。